選考員講評

【総評】

前田　比呂也　選考員長（沖縄県立博物館・美術館　班長）

当事者でない者が引いた境界線が分断を招いているようなニュースを日常的に耳にするようになった。「緑化」も、開発や都市空間、森林の保護などが対峙する言葉ではなく、ひとり一人の暮らしを豊かにする多様な活動であってほしいと考えていた。

児童生徒の作品はいずれも丹念に描きこまれ、植物と関わる態度のなかに、それぞれの生活や大切にしているもの、家族や地域との関わりが垣間見えるもので、あたたかい日差しのようであった。植物を大事に育てることが、人やコミュニティを巻き込んで、豊かな環境を創造していくような、未来の平和を期待させるような作品が多かったことに希望を抱いた。

これからも本コンクールをとおして、「１００年先を見据えた緑の美ら島の創生」が次世代を担う児童生徒の身近な関心となってもらえたらうれしいことだ。

【小学校の部　講評】

生沢　均　選考員　（公益社団法人沖縄県緑化推進委員会　常務理事）

小学生の部には17作品の応募がありました。今回の応募作品は、画面いっぱいに大きく描かれた樹木や動物たち、明るい色彩でのびのびと表現された作品が多く、どの作品からも、みどりへの思いがまっすぐに伝わってきました。

最優秀作品は、街を包み込むように大きな樹木が描かれ、未来に向けてみどりを育み、動植物と共に生きるというメッセージが力強く表現された素晴らしい作品でした。また、優秀賞の作品は、パズルのピースを用いて、さまざまな場所でみどりが広がっていく様子を描いている発想の面白さと画面構成が印象的でした。また、昆虫が集まる大きなガジュマルを力強く描いた作品もあり、生きものの息づかいが感じられる魅力的な表現となっていました。

そのほかにも、緑色の使い方を工夫した色彩豊かな作品が多く、子どもたちの自由で伸びやかな発想に感心しました。
このコンクールをきっかけに、みどりを守り育てる大切さを感じ、未来の沖縄の豊かな自然へとつながっていくことを期待しています

【中学校の部・特別支援学校の部　講評】

酒井　織恵　選考員（豊見城市立豊崎中学校　教諭）

　中学校の部の作品は、発達段階に沿った自らの表現を創意工夫している作品が多く見受けられました。テーマである「みつけよう　ひろげよう　緑あふれる沖縄県」のイメージを踏まえた、発見やつながりをイメージするような内容や沖縄ならではの植物や生き物が描かれ、画面から思いがにじみ出ていました。

　最優秀作品に選ばれた徳山緒花さんの作品は、表現力の高さが目を惹きましたが、「ガジュマルがあったおかげで…」と説明文にあるように、自然への感謝の気持ちがよく表現されていました。
　同じく最優秀賞の仲里依利子さんの作品は、樹木を包み込む両手が描かれ、「若い人の手で木を守り育て」と説明されており、それを見つめる鳥たちの眼差しも、人に守られているようで、人を守っているかのようでもあり印象に残りました。

　ポスターとしての役割を果たすためには、見る人を惹きつけるための色使いや、メッセージが伝わりやすい構図を工夫すると良いように思います。また、画面の中にキジムナーやトカゲ、オオゴマダラ、ブーゲンビリアなどがそっと描かれている作品は、練習して描いたのだろうと想像してついつい見入ってしまいました。

【高等学校の部　講評】

本村　佳奈子　選考員（沖縄県立芸術大学 美術工芸学部　准教授）

　高校生の部では、「みつけよう ひろげよう 緑あふれる沖縄県」というテーマのもと、豊かな発想と表現力にあふれた作品が数多く寄せられました。沖縄の生き生きとした植物や花、生命力あふれるガジュマルの木、きらめく木漏れ日などを題材に、緑豊かな自然の魅力がそれぞれの視点で描かれていました。

　入賞作品は、テーマを丁寧に捉え、独自の構図や表現へと発展させている点が印象的です。
　最優秀賞の岸本麻央さんの作品は、紅型をイメージした鮮やかな色彩表現や、植物や花を細部まで見つめた描写には工夫が見られました。
　同じく最優秀賞の前川アキトさんの作品は、人と動植物が共存し、自然を守っていくという思いが作品に込められており、見る人の心に深く響くものでした。
　その他の作品も多彩なアイデアと色彩を通して、緑化への思いが力強く伝わる作品群となりました。今後もコンクールを通して、一人ひとりが緑化運動について、考えるきっかけになることを願います。